様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１２８１９

研究課題名（和文）キリスト紀年の世界共通紀年化に関する思想史的研究

研究課題名（英文）The globalization of the Christian chronology in the modern period

研究代表者
佐藤　正幸（SATO, Masayuki）

山梨大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：９０１２６６４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：キリスト紀年の成立に関しては多くの研究がある。しかし、19世紀以降、キリスト紀年がキリスト教圏を越えて、世界共通紀年となった経緯に関する研究は皆無である。本研究は、19世紀以降、キリスト紀年がなぜ、またどのようにして世界共通紀年になることが出来たのかに関して研究した。
　その成果として、キリスト紀年の世界共通紀年化が可能であった理由は、①17世紀以降、キリスト紀年そのものが変容し宗教的根拠を喪失したことで非キリスト教圏においても受け入れられる受容基盤が形成されたこと、②キリスト紀年を受け入れる側が、キリスト教という宗教色を消し去ることで、世界共通紀年として受容したことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代におけるキリスト紀年の成立に関しては多くの研究がある。しかし、近代になって、キリスト紀年が、なぜ、またどのようにして世界共通紀年になることが出来たのかに関しての研究は皆無である。本研究は、キリスト紀年の世界共通紀年化が可能であった理由として、以下の２つのことを研究した。
(1)17世紀の科学革命以降、キリスト紀年そのものが変容し宗教的根拠を喪失したことで非キリスト教圏においても受け入れられる受容基盤が形成されたこと、(2)キリスト紀年を受け入れる側が、キリスト教という宗教色を消し去ることで、世界共通紀年として受容したことを解明した。例えば日本の「西暦」とか、中国の「公元」はその好例である。

研究成果の概要（英文）：This project has examined the historical process of how and why the Christian chronology was accepted by non-Christian countries since the 19th century. It has demonstrated that as a result of developments in archaeology and geology accompanying the scientific revolution of early modern Europe since the early nineteenth century, the method of counting backward serially from the birth of Christ proved extremely useful in dealing with the debate over the creation of the world. The use of the term BC was thus an accident since it was originally conceived in order to describe the years between the Biblical Creation and the birth of Christ. Secondly the project has indicated that the invention of the term BC transformed the system of Christian eras from being a specifically Christian chronology to one with a universal potential.This system is now widely used as the main chronology in many non-Christian countries.

研究分野：歴史理論

キーワード：歴史理論　紀年法　史学史　歴史哲学　歴史教育

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１. 研究開始当初の背景

キリスト紀年の成立に関しては、すでに多くの研究がある。しかし、19 世紀以降、キリスト紀年がキリスト教文化圏を越えて世界中で使用されはじめ、世界共通紀年となった経緯に関する研究は皆無である。本研究は、19 世紀以降、キリスト紀年がなぜ、またどのようにして世界共通紀年になることが出来たのかに関する世界最初の研究である。

２．研究の目的

キリスト紀年の世界共通紀年化を解明するために、本研究は、①17 世紀以降、キリスト紀年そのものが変容し宗教的根拠を喪失したことで非キリスト教圏においても受け入れられる受容基盤が形成されたこと、②キリスト紀年を受け入れる側が、キリスト教という宗教色を消し去る、或いは否定することで、世界共通紀年として受容したことの研究解明を目的とする。

３．研究の方法

(1) 平成 27 年度は、17 世紀以降、キリスト紀年そのものが変容し宗教的根拠を喪失したことで非キリスト教圏においても受け入れられる受容基盤が形成されたことに関する研究を、イギリス地質学史の研究成果を活用しながら研究を遂行する。

(1-1) ベネラブル・ベダが８世紀に *Historia ecclesiastica gentis Anglorum* で初めて提案した紀元前という概念 (ante uero incarnationis dominicae tempus) は、紀元前 4004 年と計算された世界創造の日からキリスト生誕までを逆算して数えるためだけに考案されたものであるが、これが、その後 18 世紀までどのように受け継がれてきたのかに関する研究を行う。

(1-2) James Hutton は 1788 年の論文 "Theory of the Earth" で、結語として「世界の起源に関していかなる痕跡も見つけることが出来なかったし、世界の終末に関していかなる展望も持ち得なかった」と述べたことが結果として、地球の年齢が紀元前 4004 年の世界創造年より以前に遡るという革命的な創見に繋がったことの経緯を調査研究する。

(1-3) 近世ヨーロッパで使用されていた紀年は、インディクチオ紀年・創世紀年・キリスト紀年・ユリウス通日の４つであった。これらの中で、キリスト紀年が最終的に基軸紀年となってゆく経緯について調査研究する。

(2) 平成 28 年度は、このアラビア数字が年表記にいつ頃から導入されたかを調査研究する。

(2-1) キリスト紀年が脱宗教化して、世界中で使用されるようになったことを可能にさせた背景として、ヨーロッパで 16 世紀頃から使用され始めたアラビア数字の存在がある。それまで使用されていたのはローマ数字であるが、このローマ数字は、ゼロという概念を持たず、従ってその表記法も存在せず、加減乗除には算盤を必要とした。一方、アラビア数字はゼロ符号を持つので、年表記にはただ 4 つの数字を羅列するだけという画期的な数表記法であった。アラビア数字の採用は近世ヨーロッパにおける科学革命を可能にさせた重要な背景のひとつである。そして、アラビア数字の使用が、他の非キリスト教圏におけるキリスト紀年の受容を可能にした。これは、今現在のイスラム世界及び東アジア世界における世界共通紀年としてのキリスト紀年の使用を可能にした隠れた前提である。

(2-2) 今年度の調査方法は、15 世紀以降に出版された年表記及び時間に関する著述の数表記及び紀年表記の変遷を追跡し、いつ頃からヨーロッパでは数表記がギリシャ数字からア

ラビア数字に移行し、広範に使用されるようになったのかを調査する。事前の調査では、ケルンで 1474 年に出版された Werner Rolewinck, Fasciculus temporum　が極めて早い時期のものであることを確認している。
(2-3) 調査研究実施場所は、前年に引き続いて近世の蔵書を直接閲覧研究できるケンブリッジ大学図書館稀覯書室を予定している。ここの稀覯書室が所蔵する蔵書の紀年表記を遡ってゆくことで、アラビア数字が紀年にいつ頃からどのようにして取り入れられてきたかを解明する。

(3)平成 29 年度及び延長年度の平成 30 年度は、キリスト紀年を受容する側が、どのようにしてキリスト紀年を脱宗教化した上で受容してきたかを調査研究する。
(3-1) 脱宗教化によるキリスト紀年の導入で最も注目すべきは、明治日本が基督紀元・西洋紀年・西洋紀元・西暦という多様な名称のもとにキリスト紀年を導入したことである。この導入は、最終的に西暦として定着するのだが、この定着過程を調査研究する。
(3-2) 旧共産主義国によるキリスト紀年の受容プロセスの研究。共産主義国家といえどもキリスト紀年を否定して別の紀年を使うことが出来ず、最終的にキリスト紀年を「我らの時代＝ナシャエイリ」という表記にすることで、キリスト教色を排除して使用した。この旧共産主義国家型紀年法は、中国では「公元」として導入され 1949 年に公式に採用された。この公元がいつ頃導入され、どのような形で広く使われるようになったのかの研究を行う。
(3-3) 現在、中国と日本・韓国の間でキリスト紀年の漢字表記及び呼称が異なるのは、そのキリスト紀年導入のルートが異なるためではないかというのが、研究代表者の仮説である。本年度は、慶應義塾大学図書館が所蔵する当時の日本と中国で出版された新聞の年月日表記を調査し、併せて当時の中国知識人の書簡（例えば郭沫若）に見る年月日表記を精査することで、この調査研究を行う。
(3-4) 年表記に関して様々な方法が考案されてきたが、現時点では、キリスト紀年から抜け出すことは不可能である。なぜ抜け出せないのかに関して、思想史的な視点から研究する。

４．研究成果

(1) 平成 27 年度は、地質学の発達と世界創造年という概念自体の崩壊がキリスト紀年を如何に変容させたかについて研究した。
(1-1) 17 世紀以降、キリスト紀年そのものが変容し宗教的根拠を喪失したことで非キリスト教圏においても受け入れられる受容基盤が形成されたことに関する研究を、Roy Porter の *The Making of Geology* 等に始まるイギリス地質学史の研究成果を活用しながら遂行した。
(1-2) Venerable Bede が 8 世紀に *Historia ecclesiastica gentis Anglorum* で初めて提案した紀元前という概念 (ante uero incarnationis dominicae tempus) は、紀元前４００４年と計算された世界創造の日からキリスト生誕までを逆算して数えるためだけに考案されたものが、その後どのように受容され、同時に拡大解釈されてきたのかに関する研究を行った。
(1-3) James Hutton は 1788 年の論文“Theory of the Earth”で、"The result, therefore, of our present enquiry is, that we find no vestige of a beginning, no prospect of an end."

と述べている。この発見は、過去と未来は無限に双方向に伸びているものであるという時間観・歴史観を提出する基礎となったことを研究した。

(2)平成 28 年度は、アラビア数字が、紀年表記にいつ頃から導入され始めたのかの特定と、その社会文化的・紀年表記的背景に関する調査研究を行った。
(2-1) キリスト紀年が脱宗教化して、世界中で使用されるようになったことを可能にさせた背景として、ヨーロッパで 16 世紀頃から使用され始めたアラビア数字の存在がある。本年は、ローマ数字がどのようにしてアラビア数字に置き換わっていったのかを、アラビア数字を使用した最も初期の歴史年表である Jean Funck, *Chronologia : hoc est, omnium temporum et annorum ab initio mundi usque ad resurrectionem Domini nostri Iesu Christi computatio* (Nueremberg, 1545) を中心に、それらの紀年表記法に焦点を当てながら調査研究した。
(2-2) 次に、なぜローマ数字からアラビア数字への数表記(numerical notation)の変更が行われたのかの研究を行った。その研究結果として言えることは、16 世紀以前まで使用されていたのはローマ数字であるが、この数字は、ゼロという概念表記手段を欠いていた。ところがアラビア数字はゼロ概念とその表記符号を持つので、年表記にはただ 4 つの数字を羅列するだけという画期的な数表記法を提出したことが大きな要素であったという研究成果を得た。
(2-3) アラビア数字の採用は近世ヨーロッパにおける科学革命を可能にさせた重要な背景のひとつである。このことを、ケンブリッジ大学図書館が所蔵する Issac Newton の自筆ノートを中心に調査研究した。
(2-4) アラビア数字の使用とキリスト紀年の世界伝播の関係を調査研究するために、19 世紀以降の非キリスト圏におけるキリスト紀年の使用に関して、関連資料の蒐集と調査研究を行った。

(3)平成 29 年度及び平成 30 年度は、キリスト紀年を受容する側が、どのようにしてキリスト紀年を脱宗教化した上で受容してきたかを調査研究した。
(3-1) 脱宗教化によるキリスト紀年の導入で最も注目すべきは、明治日本が基督紀元・西洋紀年・西洋紀元・西暦という名称でキリスト紀年を導入したことである。この導入は、いくつか名称表記を変えた後、西暦として定着するのだが、この定着過程を調査研究した。
(3-2) 旧共産主義国によるキリスト紀年の受容プロセス：共産主義国家といえどもキリスト紀年を否定して別の紀年を使うことが出来ず、最終的にキリスト紀年を「我らの時代＝ナシャエイリ」という表記にすることで、キリスト教色を排除して使用した。この旧共産主義国家型紀年法は、中国では「公元」として導入され 1949 年に公式に採用された。この公元がいつ頃導入され、どのような形で広く使われるようになったのかの研究を行った。
(3-3) 現在、中国と日本・韓国でキリスト紀年の呼称が異なるのは、そのキリスト紀年導入のルートが異なるためではないかという研究代表者の仮説を検証するために、慶應義塾大学図書館が所蔵する当時の日本と中国で出版された新聞の年月日表記を調査し、併せて当時の中国知識人の書簡（例えば郭沫若）に見る年月日表記を精査した。
(3-4) 年表記に関して様々な方法が考案されてきたが、現時点では、キリスト紀年から抜け出すことは不可能である。なぜ抜け出せないのかに関して、思想史的な視点から考察研究した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 佐藤正幸「西洋史学はディシプリンかー母国語による近代化の上に成立した世界的にユニークな学問」『西洋史学』 (第 260 号) , pp.42-55　2016 年 12 月　（査読有）

② 佐藤正幸「西ヨーロッパと東アジアにおけるヒストリオグラフィーのアーキタイプ研究」『山梨国際研究』 No.11,　pp.82-98, 2016 年 3 月　（査読有）

③ Masayuki Sato, "Time, Chronology, and Periodization in History," *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences*, 2nd edition (Oxford: Elsevier), Vol. 24, pp.409-414　2015 年 5 月（査読有）

④ Masayuki Sato, "Historical Thought and Historiography: East Asia," *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences*, 2nd edition (Oxford: Elsevier), Vol 11, pp.48-53　2015 年 5 月（査読有）

〔学会発表〕（計 8 件）

① Masayuki Sato, “East Asian History of Historiology in Comparative Perspective” [招待有]　The NAMO Conference on World Historiography (University of Poznan, Poland)　2019 年 2 月 24 日

② Masayuki Sato, “East Asian Philosophy and Practice of Writing History” [招待有] The ICHTH Workshop meeting　2018 年 8 月 25 日

③ Masayuki Sato, “Visualization of Historical Time” [招待有]　The 3rd INTH network Conference　2018 年 8 月 20 日

④ Masayuki Sato, “Core Concept of Japanese Historical Thinking” [招待有]　The International Workshop of Core Historical Thinking　2016 年 10 月 28 日

⑤ Masayuki Sato, “Changing World Images in History Education” [招待有]　The 3rd IRAHSSE Conference "Time and Space in History and Social Sciences Education" 2016 年 9 月 7 日

⑥ Masayuki Sato, “Rekishi; From Chinese official historiographies to what happened in the past” [招待有] International Taipei Conference on the Basic History Terms (National Taiwan University, Taiwan)　2015 年 11 月 12 日

⑦ Masayuki Sato, ‘The Role and Purpose of Historiography in East Asia” [招待有] International Conference on the History of Twentieth Century Historiography (University of Athens, Greece)　2015 年 6 月 20 日

⑧ Masayuki Sato, “The World is One, but Histories are Many” [招待有] AAWH International Conference　(Nanyang Technological University, Singapore)　2015 年 5 月 30 日

〔図書〕（計 2 件）

① 佐藤正幸著・郭海良訳『歴史認識的時空』全 378 頁（上海三聯書店、2019 年 5 月 1 日）

② Masayuki Sato（分担執筆）　*International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences,* 2nd edition (Oxford: Elsevier)　2015 年 5 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。